

月刊 インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 110 年)



Grand Finale of the 60th Anniversary of Japan-India Diplomatic Relations
Spectacular Fireworks Show at India Gate Lawns (Dec 7 2012)

〈写真提供：在インド日本国大使館〉

目次

1. 年頭のご挨拶 P. 3
2. 2013 年の年頭所感 P. 4
3. 日印国交樹立 60 周年事業と「花火と映像のグランド・フィナーレ」 P. 7
4. ニューデリー出張報告 P. 9
5. 石見神楽インド公演 P. 10
6. 大阪大学における平林理事長講演会と日印国交樹立 60 周年記念写真展 P. 12
7. インドニュース (2012 年 12 月) P. 14
8. イベント紹介 P. 18
9. 新刊書紹介 P. 20
10. 日印貿易概況 (2012 年第 3 四半期-前年との比較) P. 22
11. 掲示板 P. 23

1. 年頭のご挨拶 New Year's Greetings

公益財団法人 日印協会
代表理事・会長 森 喜朗
2013年1月



皆様

明けましておめでとうございます。
平素より、当協会に対するご支援とご協力に心から感謝申し上げます。

本年は、当協会が1903年(明治36年)大隈重信侯爵、長岡護美子爵、澁澤榮一翁によって創設されてから、110周年となる節目の年を迎えましたことはまことに喜ばしく、皆様とともに祝意を表します。

創立以来、当協会は日印官民の御理解・御鞭撻と会員の皆様のたゆまざる御支援の下で、日印関係においてもっとも長い歴史を有し、日印双方から絶大の信頼をおかれた民間団体として、両国間の友好親善関係の発展に最大限の努力をして参りました。その結果、日印両国民間の絆を強化することに少なからず貢献できました。この記念すべき節目の年に当たり、当協会は、会員の皆様とともにさらなる経済の交流、文化学術の交流、人の交流などを通じて、日印関係の深化・拡大を達成できるよう、一層の努力を傾注して参ります。

昨年、2012年は、1952年に日印両国が平和条約に調印し、外交関係が樹立されて60周年を迎える意義ある年となり、日印両国内で数多くの記念行事が実施されました。当協会は、なかでも、昨年3月ニューデリーのインド国際センターにおいて、同センター及び国際交流基金ニューデリー事務所との共催により、60周年記念行事の一環として、「日印友好の歴史写真展」並びに「日印関係の回顧と展望」と題するシンポジウムを、日印の有識者参加の下で開催し、大変好評を博しました。また、チェンナイでも写真展は好評でした。私は、この機会に日印協会会長として平林理事長などを帯同し、ニューデリーを訪問し、マンモハン・シン首相ほか政府要人と懇談する機会を得て、相互理解を一層深めることができましたことを大変嬉しく思っております。当協会は、両国政府及び民間団体が企画実施した実に多くの記念行事にも御支援申し上げます。その結果、国交60周年が無事に幕を閉じ、新たな年を迎えたことを、皆様とともに心からお祝い申し上げます。

現在ある良好な日印関係は、一朝一夕に出来上がったものではなく、両国政府並びに両国民の長年にわたる忍耐とたゆまざる努力の結果であると確信します。特に、2000年私が現職の総理大臣として10年ぶりに訪印し、当時のバジパイ首相との間で「日印グローバル・パートナーシップ」を調印したことは、核実験によって冷却した両国関係を建て直したのみならず、21世紀の大国として日印両国が国際社会に貢献する決意を表明するものとなりました。その後、両国関係は、「日印戦略的グローバル・パートナーシップ」へと発展しました。本年も、その精神の下で、両国の友好親善関係が益々発展するとともに、日印関係が東アジアや世界のために貢献することを願ってやみません。

2010年11月、内閣府より公益財団法人として認可され、新たな一步を踏み出した当協会は、法人会員・個人会員の皆様の絶大な御理解と御支援を戴きながら、日印友好親善の拡大強化という公益のために努力いたしております。webサイト、月刊誌『月刊インド』及びWEB季刊誌『現代インド・フォーラム』の発刊を通じた情報の評価分析および皆さまへの提供、展示会、講演会、文化行事などの主催や後援等による相互理解増進と親善の強化のほか、日印のビジネス関係の促進のために助言及び支援をいたしております。今後も民間レベルでの日印交流の輪が拡大するよう努力して参ります。

本年は、わが国の政治・経済・外交にもようやく光が見え始め、長らく低迷していたわが国が再起する年になるように感じます。皆様の益々の御健勝と御活躍をお祈りしつつ、当協会も日印関係の増進を通じてわが国の地位の向上に貢献できますことを信じて、年頭の御挨拶とさせていただきます。

2. 2013年の年頭所感—日印協会110周年の回顧と展望 110 Years of the Japan-India Association—Retrospect and Perspective

(公財)日印協会 代表理事・理事長 平林 博

2013年正月

明けましておめでとうございます。

あらためて平素からの皆様の御支援に感謝申し上げます。

昨年は日印国交樹立60周年を成功裏に祝いましたが、本年は、わが日印協会の創立110年目にあたります。

1. 日印協会の歩み

(1) 日印協会は、1903年(明治36年)に、当時のわが国の政治・経済・文化の指導者であった大隈重信侯爵、長岡護美子爵、澁澤榮一翁の3人が発起人になられて創設されました。特に、大隈重信は元首相かつ早稲田大学の前身である東京専門学校(現早稲田大学)の創立者で初代の早大総長、澁澤榮一は500余りの企業を興した日本資本主義の父とよばれました。

当時インドは英国の植民地であり、英国の派遣した副王(Vice Roy)が治めるBritish Rajと呼ばれていました。わが協会の創設者たちは、明治の近代化を推し進めた先駆者でアジアの時代が来ることを予感し、特にインドとの通商の重要性を認識していたのでした。他方、お互いの文化を高く評価し日印の文化交流の重要性を認識していたのが、日本では日本美術の振興者岡倉天心や日本画の大家横山大観、インドでは詩人ラビンドラナート・タゴール(アジアで最初のノーベル文学賞受賞)などの文化・知識人でした。

インドでは、20世紀を迎えるとともに、19世紀後半から起こった対英独立運動が盛んになり、マハトマ・ガンジーが国民運動をリードし、ジャヤハルラル・ネルー等が国民会議派を核に政治活動を活発化しました。

1904年には日露戦争が起こり、翌年にはポーツマス講和会議で日本の勝利が確定しました。ネルーは、1930年から33年までに、獄中で書いて娘(後に首相となるインディラ嬢)に送った196通の書簡を『娘に語る世界史』(Glimpses of World History)と題した本にして出版しました。その中で、日本の勝利に興奮して次のように書きました。

「日本は勝ちました。そして大国の仲間入りをしました。アジアの国日本の勝利は、すべてのアジア諸国に計り知れない影響を与えたのです。少年の私がこれにいかにも興奮したか、以前、あなたに話したことがありますね。この興奮は、アジアの老若男女すべてが分かち合いました。ヨーロッパの大国が負けました。アジアはヨーロッパに勝ったのです。アジアのナショナリズムが東の国々に広がり、『アジア人のためのアジア』の叫び声が聞こえました……」(筆者訳)

(2) 日印協会は、その後、わが国の官民各方面の支援で発展し、あるいはわが国のインドとの通商を支援し、あるいはまだ外交関係を持てなかった日本政府の対インド関係の先兵として活躍しました。

初代会長は長岡護美子爵、第2代会長は大隈重信侯爵、第3代会長は澁澤榮一翁、第4代会長は大隈信常(早大名誉総長)が務めました。

大正年代から昭和初期にかけて、日印協会は経済活動に重点を置き、カルカッタに日本商品館を置いたり、インド各地を列車に搭載した日本産品を紹介したり、貿易の促進に貢献しました。1939年には、日本政府から財団法人に認定されました。

しかし、第2次大戦がはじまると協会の活動は衰え、大戦直後は、連合軍によってインドの独立に協力したとされて、日印協会の活動は禁止されました。

(3) 1947年、インドが独立するとともに、「日印経済協会」の名称で復活し、インドとの官民の窓口として貢献しました。ネルー首相のもとで、インドは、灰燼に帰したわが国に対し温かい態度で接しました。インドは、わが国の戦後復旧・復興に必須であった鉄鉱石の輸出を許可し、また、ネルー首相自身、日本の子供たちの嘆願を聞いて、上野動物園に娘の名を付けた仔象インディラを贈りました。

極東軍事裁判において、インド出身のラダ・ビノード・パル判事は、ただ一人、この裁判の無効と日本人戦犯たちの無罪を主張しました。パル判事の少数意見は、法律家・国際法学者としての確固たる理論構成によって主張されたものですが、筆者は、日本と関係の深いベンガルの出身であるパル判事には、日本に対する同情と欧米戦勝国に対する反発の気持ちがあったのではないかと思います。

インドは、1951年のサンフランシスコ講和会議は、戦勝国が戦敗国日本に対し圧力をかけて不利な条件で講和するものだと断じ、敢えて参加しませんでした。そして、1952年に独立を回復した日本と対等な関係で日印国交樹立を行いました。勿論、インドは対日賠償を放棄しました。

(4) 日印両国が国交を樹立すると、それまでの日印経済協会は、戦前の日印協会の名を取り戻しました。同時に、第5代目の会長として、日本銀行総裁であった一万田尚登が就任しました。活動は、経済のみならず文化や人的交流に広がりました。1977年、第6代会長として櫻内義雄衆議院議員(日印友好議員連盟会長)が就任しました。櫻内会長は、外務大臣や衆議院議長も務め、政治分野でも日印関係の強化に貢献しましたが、日印協会の活動にも大変熱心で、インド側から高く評価されました。

一万田、櫻内両会長はそれぞれ25年ずつの長きにわたって務めました。2002年に森喜朗前首相が第7代会長に就任しました。

(5) 森会長は、2000年8月、10年ぶりに現職の首相としてインドを公式訪問し、バジパイ首相との間で「日印グローバル・パートナーシップ」を樹立し、1998年のインドによる核実験で冷却化した日印関係を建て直しました。日印関係を修復し、今日の素晴らしい日印関係の基礎を築いた森会長は、日印関係の中興の祖とされております。筆者は、当時、日本の第20代駐インド大使として森首相をお迎えし、また、2002年には、日印国交樹立50周年の諸行事を実施いたしました。そのような縁もあり、またインドで5年近くにわたり(歴代最長在任記録)大使を務めた関係もあり、筆者が外務省を退官すると、森会長はそれまでなかった日印協会理事長の職を創設し、筆者を迎えました。

それ以後今日に至る間に、日印協会は、2006年には33社に減じていた法人会員が110社まで回復するとともに、個人会員は400名を超えるに至り、日印両国を結ぶ強力な橋として発展を遂げてきました。

1909年から続く機関誌は連続と続いていましたが、2006年以降、新版『月刊インド』として紙面が拡大されカラー版となりました。2008年からは、日印協会はウェブサイトを立ち上げました。2009年には、高度なレベルでインドや日印関係を論ずるウェブ版季刊誌『現代インド・フォーラム』が創刊され、学者、研究者、実務者たちによるインドや日印関係に関する論文が紹介されてきました。

(6) 21世紀に入り、インドは新興国として益々注目を集め、経済面のみならず世界政治における政治的発言力や戦略的重要性が増してきました。日印両国政府の関係も、「グローバル・パートナーシップ」宣言以来、上は首相の相互訪問から閣僚、各省次官級など多層的な関係が強化拡充されてきました。日本企業のインドへの進出も加速されるようになり、昨年10月現在920社になりました。

2008年には、安倍晋三首相(当時)とマンモハン・シン首相により、日印グローバル・パートナーシップは「日印戦略的グローバル・パートナーシップ」へと発展し、より戦略的に重要な関係に格上げされました。安倍首相は、2008年8月、インドの国会で「二つの海の交わり」と題する素晴らしい演説を行い、太平洋国家日本とインド洋国家インドの二国間関係が、日印両国のみならず、世界やアジアにとっても極めて重要であることを指摘し、インド人から共感をえました。わが国は、インドとの間で、国連安全保障理事会の改革、世界貿易システムの改革などグローバルな協力を推進するとともに、インドの東アジアへの関与を懲慥・推進し、東アジア首脳会議へのインドの加盟、日米印さらには日米印豪などの地域的な協力の枠組みを築いてきました。二国間では、両国の首相が毎年相互に相手国を訪問する約束が確立したほか、重層的・多角的政府間対話と、政治・安全保障から経済、文化学術、人的交流など幅広い分野での協力が進展しました。

(7) 日印協会は、1939年に日本政府から財団法人として認定されてきましたが、2010年、新たな法令の制定を受けて、内閣府により公益財団法人の認定を受けました。内閣府への申請後わずか2カ月で認可されましたが、これは異例のことで、長年の功績と団体としての非の打ちどころのない運営が評価されたからでした。

昨年2012年は、日印国交樹立60周年であり、日印協会は、所有する貴重な写真を中心に関係方面からも厳選収集し、インドや日本で「日印100年の歴史写真展」を開催しました。また、幾つかの講演会も主催しました。それとともに、両国政府や民間団体・個人が開催した多くの友好交流行事を後援しました。また、日本からの投資などの経済進出活動や学生交流などを支援しました。

2. 本年の展望

(1) 日印関係は極めて良好に進展しつつあり、昨年12月に、インドでも極めて高く評価されている安倍晋三首相が政権に就いたことは、日印関係が飛躍するチャンスをもたらしました。

しかし、日印関係は、その潜在的な重要性や大きな可能性にもかかわらず、まだまだ不十分です。2012年10月に内閣府が行った世論調査によると、インドに「親しみを感じる」日本人は47.0%（「親しみを感じる」10.1%+「どちらかと言えば親しみを感じる」36.9%）であるのに対し、「親しみを感じない」44.4%（「どちらかと言えば親しみを感じない」26.0%+「親しみを感じない」18.4%）でした。もっとも、日印関係は全体として良好だと思ふかとの質問に対しては、「良好だと思ふ」62.%（「良好だと思ふ」9.1%+「どちらかと言えば良好だと思ふ」53.6%）に対し、「良好だと思わない」24.7%（「あまり良好だと思わない」18.9%+「良好だと思わない」5.8%）と、かなり良い点が付けられます。

これに対し、3年前の在インド日本大使館によるインドでの世論調査では、インド人の76%が「日本を好き」と思い、92%が日印友好関係の増進を期待し、94%が日本企業の進出を歓迎しました。

要するに、日印関係は進展しているが、依然として、インド人の日本人への「片思い」的どころが残っているのです。

(2) 今後は、日印互惠関係の上からも、国連改革、地球温暖化対策、世界的な伝染病対策など地球規模の問題に対応するためにも、さらには益々強大化する中国が日印双方に及ぼしつつある軍事的脅威に対するためにも、日印両国はがっちりとスクラムを組む必要があります。特に、東アジアの安全保障のためには、インドの関与が増大する必要があり、これに双方の同盟国あるいは友邦である米国、さらには同じような民主主義的価値観を共有する東南アジアや大洋州の諸国と協力を推進する必要があります。

同時に、経済面で双方が持つ可能性を追求していくことが重要です。インドは、日本の政府開発援助（ODA）の最大の受け取り国であり、デリー・メトロをはじめ数えきれないほどの成功を治めてきました。しかし、今後は、貿易投資という民間協力が一段と進められるべきです。すでに両国政府は、そのための多くのメカニズムを立ち上げ、デリー・ムンバイ産業大動脈構想（DMIC）、デリー・ムンバイ貨物新線建設計画（DFC）、ベンガルール（バンガロール）・チェンナイ高速鉄道建設計画など多くのプロジェクトを推進しています。

また、文化学術面でも、双方の有力大学間の協力促進のほか、両国政府が肝いりでインド工科大学の創設や充実のために協力を開始しています。宇宙科学、ナノ・テクノロジーやバイオなどの科学技術面での協力も進展しています。これからは、このような各分野での協力を進めるとともに、次代を担う青少年の交流（留学生の増加、ホームステイや企業によるインターンシップの受け入れ強化など）や観光の促進、地方公共団体やNGO関係強化の促進などにより注力していく必要があります。

(3) 昨年11月16日には、民間外交推進協会（FEC、筆者はFEC日印文化経済委員会顧問を兼任）及び日印友好議員連盟と共催で、訪日するマンモハン・シン首相による国民向けの講演会の開催を予定しておりました。折角のチャンスは、わが国の衆議院解散とともに流れましたが、マンモハン・シン首相の日本公式訪問も遠くない将来に行われます。来る訪日の際には、再度同じ共催者とともに、シン首相のわが国国民向けの講演会を開催したいと考えます。

また、日印協会110周年を記念して、何らかの記念行事・事業を行うべく考えて参りたいと思います。

日印協会は、今後さらに重要となる日印協力関係において、イニシアティブをとるとともに、各種団体や個人のイニシアティブを支援していく所存です。

創立110周年の年頭に当たり、日印協会をこれまで御支援して下さってきた企業や団体の法人会員および多くの個人会員の皆様に対し、深甚なる感謝の念をお伝え申し上げますとともに、今後とも御指導御鞭撻いただきますよう、心からお願い申し上げます。

3. 日印国交樹立 60 周年事業と「花火と映像のグランド・フィナーレ」 60th Anniversary of Japan-India Diplomatic Relations

日印国交樹立 60 周年実行委員会事務局

吉田綾(在インド大使館参事官) / 野田亮二(在インド大使館参事官)

1. 日印国交樹立 60 周年事業 170 件の成果

日印国交樹立から 60 周年を迎えた 2012 年、官民で構成される 60 周年実行委員会のもとで、「復興する日本、躍動するインド：新たな視点、新たな交流」をテーマとし、①日本の伝統・現代文化の紹介、②知的交流、③日本の先端技術・製品の紹介、を 3 本柱とする 170 件もの事業がインド全土で実施された。

主な事業としては以下が挙げられる。

(1) 日本文化紹介分野：「東京コレクション・イン・デリー(2 月)」、「江戸木目込み人形展(3 月)」、「畠中光享 日本画展(8 月)」、「観世流能公演(8 月)」、「日本武道館公演：武道デモンストレーション(11 月)」、「石見神楽公演(12 月)」、「アニメ・ライジング・スター(「巨人の星」クリケット版)TV 放映記念行事(12 月)」

(2) 知的交流：「ビジネスリーダー講演会(11 月)」、「日印相互のイメージ形成を探るシンポジウム(12 月)」

(3) 日本の技術・製品の紹介：「日本製ウイスキー・テイasting(2 月)」、「日本酒紹介イベント(3 月)」、「日本産品展(3 月)」

また、日印関係の歴史を辿るイベントとして、森喜朗元総理・日印協会会長のご出席を得て日印協会が主催した日印交流写真展、およびこれまでの両国関係(回顧)と今後の在り方(展望)を議論するシンポジウムが 3 月に開催された。そして、12 月 7 日には 60 周年の締めくくりとして、インド門にて「花火と映像のグランド・フィナーレ」(後述)が行われた。

行事毎の詳細については、在インド日本国大使館のホームページに掲載されているので参照いただきたい。(URL http://www.in.emb-japan.go.jp/2012celebrations/celebrations_2012.html)



〈日本製ウイスキーテイasting〉

前述(1)の日本の伝統芸能の当地での公演のため、各分野の「真髄」を体現する方々が訪印された。「観世流能公演」は、観世流 26 代観世清和氏率いる能楽師グループが訪印、「武道デモンストレーション」では、日本武道館が約 70 人の武道家を派遣し、6 千人の観客がみまもる中、インディラ・ガンディー・スタジアムにおいて 12 種目の演武を実施した。また、日本のいわゆるポップ・カルチャーを代表するアニメを紹介する「アニメ・ライジング・スターTV 放映記念行事」では、「巨人の星」の作画を担当した川崎のぼる氏および原作者の故梶原一騎氏の篤子夫人が出席した。日本で 1960-70 年代に一世を風靡したアニメ「巨人の星」をインドで最も人気の高いクリケットを題材としてリメイクし日印の共同により制作されたもので、12 月下旬から毎週日曜朝に放映(ヒンディー語)されている。近時、インドでの日本アニメ人気



〈武道デモンストレーション〉

が急激に高まる中、今回の TV 放映は大きな反響を呼ぶことが期待される。

前述(3)の中では、日本の品質の高さを体感してもらうことを主眼とした「日本酒紹介イベント」では、日本の4つの蔵が訪印、出席したインドの酒類業者等が日本酒の美味さに舌鼓を打ち、具体的な商談にもつながった。

このような170に上る関連事業は、インド政府・民間の関係機関・団体、日本・インド企業他、皆さんが一丸となって、企画・準備、実施、広報、参加して実施され、大きな成果を生むこととなった。この60周年事業の実施を通じて培った成果を踏まえ、引き続き皆様のご協力を賜りながら、さらなる日印関係強化のため、力を尽くしてまいりたい。



2. 「花火と映像の60周年グランド・フィナーレ」(2012年12月7日：於インド門)

(1)12月7日(金)午後9時頃、首都ニューデリーの中心にあるインド門の芝生には約5千人の人々が集まった。そして午後9時、インド門周辺の全ての照明が消え真っ暗となった直後、約50メートルの高さのインド門をスクリーンとして照射する映像(「プロジェクション・マッピング」)が音楽とシンクロした形で開始した。インド門に集まった多数の人々ばかりではなく、国営報道TV(DoorDarshan)の生中継を見ていたインド全国の視聴者は、このカラフルな映像に息をのんだ。

(2)この花火と映像のショーは、12月1日に予定されていたが、I. K. グジュラール元首相が、開催予定日の一日前となる11月30日に逝去し、インド政府が7日間の喪に服することを決定したことを受け、インド政府との相談の上、その助言を受けて延期となった。その後、出来る限り早いタイミングで実施するとの方針の下で関係当局・機関との調整の結果、喪が明けた7日の実施の運びとなった。

(3)約10分間のインド門への映像の投影は、巨大なインド門があたかも音を立てながら形成されるイメージ、インド門にカラフルで立体的な滝が流れ、雷を伴いながら溜まった水が吹き出すイメージ、日本の季節の象徴である満開の桜や紅葉、インドの象徴である孔雀の羽に覆われるシーン、ラジャスタンやサリー等のインドの伝統的な模様が次々に投影された。また、日印両国の風景・自然として富士山、アルプス、ガンジス川、祭りのシーン等、両国の文化と友好を表す映像が映し出され、観客を魅了した。

- (4)映像に続いて、インド門芝生において花火の打ち上げが始まり、最高 150 メートルの打ち上げ花火を含む約 2,200 発の花火が約 10 分間続いた。これらの花火は、日本の花火師がインドの花火師と技術協力したものである。色鮮やかな様々な形状の日本的な花火は、単色の花火を見慣れたインドの観客に大きな驚きとともに迎えられた。また、空高く上がってから花開く「コメット型」花火と地面から吹き出す「メイン型」の双方同時打ち上げやスマイル・マーク、ハート・マークを花火で夜空に描く日本の花火の技術はインドで初のお目見えとなった。
- (5)花火と映像のショーが行われている約 20 分の間には、インド門に集まった観客から何度も大きな拍手や歓声があがった。行事終了後もこの行事について、「あのような美しい花火や映像は見たことがない」等、今回の花火と映像の行事が素晴らしい行事であったとのコメントが多数寄せられた。当地有力紙のザ・タイムズ・オブ・インド紙、ヒンドゥスタン・タイムズ紙を始めとする全 10 紙が関連の記事を掲載し、また、各紙電子版記事として掲載、翌 8 日早朝には、インド民間放送がニュースとして放映、地方 TV 局も生中継の様様をホームページに掲載する等当地での反響の大きさが窺われた。
- (6)同行事は、インド国営放送 TV (Doordarshan Bharati; 文化チャンネル)にて同日午後 9 時から約 20 分間インド全国に生中継された。生中継放送後、同 TV は日本特集番組として、同局関係者の訪日時(日本番組制作 TV チーム招聘にて訪日)に収録した、今回の花火・映像の総合プロデューサーであるコシノ・ジュンコ氏へのインタビューおよび日本の文化・技術の紹介や東京で開催されたナマステ・インド祭の様様等を放送した。
- (7)このグランド・フィナーレは、階層を問わずインドの人々の誰もが楽しめ、心に残る事業を 60 周年事業の締めくくりとする、との目標のもと、1 年以上の期間を準備に費やして実施された。周年事業としての予算手当のない中で、日印関係強化に強い関心を有する日本・インドの主要企業からの寛大なる支援のもとで、今回の壮大なプロジェクトが成功したことは、今後、両国関係の一層の飛躍を確信させる。また、首都の中心かつ重要な歴史的建造物であるインド門における花火を行うとの前例のない企画のために、特別に使用を許可したインド政府の日本に対する協力なくして、この事業はありえなかった。改めて本件事業の成功に尽力いただいたすべての方々に深く御礼申し上げる。



※本文中の写真提供; 在インド日本国大使館

4. ニューデリー出張報告 New Delhi Report

(公財)日印協会 業務執行理事・常務理事 原 佑二

昨年 12 月 1 日から一週間ニューデリーに出張致しました。日本大使館を始め、JICA、JETRO などの政府関係機関、みずほ銀行や三菱商事などの日系企業の幹部の方々よりインドの最新の状況を伺い、また貴重な資料を頂戴致しました。私自身、一年半ぶりの訪問でしたが、経済発展する“巨象の国”の変化を肌で感じて参りました。

特に、一昨年 8 月の包括的経済連携協定(CEPA)発効後両国間の貿易が拡大していること、大型事業の先駆けとなる DFC(デリー・ムンバイ貨物新線)がいよいよ着工に向けて動きが加速し、DMIC(デリー・ムンバイ産業大動脈)関連ではいくつかの大型事業の具体化検討が始まるなど経済面ではさらなる拡大への期待が高まっています。デリー市内と空港を直接結ぶメトロ空港線が、高架橋の支柱部分に不具合があり、長期間運休するなどのハプニングなどはありますが、デリーメトロは 10 年という短期間の間に 6 路線 総延長 143Km

と、東京の8路線183Kmや大阪の8路線130Kmにも並ぶ規模に達しました。昨年は、ベンガルール(旧バンガロール)メトロが一部開通、チェンナイの工事も進展するなど目に見える変化があります。



今回、9年ぶりにデリーのVasant Kunji 地区にあるニューデリー日本人学校に伺い、臼井晴久校長先生(写真上 右側)に学校内を案内していただきました。「ニューデリー日本人学校」は1964年に創立、1991年に現在の場所に校舎が新設されました。歴代の多くの先生方とPTAの、更には邦人企業を中心とする運営委員会の方々の熱心な取り組みで、学校は思いやりのある温かな校風と、質の高い教育で高い評価を得てきました。生徒数は5年前の190名が2012年度は275名に達し、長年の課題であった校舎の増築準備(写真下 写っているのは仮設校舎)も始まりました。これは在留邦人の数が増えたことは勿論ですが、両国関係の長期的な発展を見据えて、家族を帯同し、腰を据えて仕事に取り組む邦人が増えた結果だと思えます。



昨年は「日印国交樹立60周年」ということで、日印両国でそれぞれ200近い関連行事が開催されました。日本においては、昨年2月の「札幌雪祭り」での巨大な「雪のタージ・マハル」とボリウッド・ダンス(『月刊インド』2-3月合併号で紹介)、奈良東大寺での記念行事等々と記憶に残る多くの行事が開催されたことをご存知の通りです。我々が直接目と触れる機会は少ないインドでの関連行事ですが、今回、日本大使館の野田亮二、吉田綾両参事官より「60周年行事」の概況と写真の提供を頂きました。

とにかく圧巻は、12月7日のデリーの中心 インド門の広場にて繰り広げられた世界に冠たる日本の花火とインド門をレーザー光線で飾るという一大イベントだったようです。日本でもNHKニュースでも紹介され、またYouTubeでも“インド門 花火”で検索するとご覧になれます。

私の滞在中にも、島根県の郷土芸能である石見神楽の公演がニューデリーの中心にあるFICCI(インド商工会議所連盟)のホールやチェンナイで開催されました。FICCIでの公演は、日本の伝統芸能である神楽を舞台一杯に繰り広げた熱演に対し、ホールを埋め尽くしたインドの人々からの惜しみない拍手と喝采が強く印象に残りました。石見神楽のインド公演については実現に奔走された、当協会の理事の勝田友治氏に寄稿頂きました。

今回の訪問でお世話になったデリーの皆様に心より感謝申し上げるとともに、出張の成果を協会の活動に活かしていくこととお約束して、私の出張報告とさせていただきます。

5. 石見神楽インド公演 IWAMI KAGURA - Sacred dance performance

(公財)日印協会 理事 勝田 友治



日印国交樹立60周年記念行事として島根県西部、石見地方の伝統民族芸能「石見神楽」を12月2~3日に首都ニューデリー、5~6日に南部の主要都市チェンナイで公演しました。その結果を報告致します。

全体日程

11月30日(金)24時浜田市発、12月8日(土)21時浜田市着、8泊9日(車・機中2泊)

(*団員が会社員、自営業等の為に週末を活用した日程)

<インディラ・ガンディー空港にて 筆者は中段右>

公演日程等

- ①12月2日(日)15時から約2時間・ワークショップ 於 国際交流基金ホール、観客: 約70名(収容定員50名)
- ②12月3日(月)19時から約2時間・一般公演 於 FICCI ホール、観客約600名(収容定員630名)
- ③12月5日(水)15時30分から約2時間・マスコミPR、他 於 Kamaraj hall、観客約70名
- ④12月6日(木)13時から約20分・ミニ公演(恵比寿) 於 コマツチェンナイ工場、観客約230名(全従業員)
- ⑤18時45分から約2時間・一般公演 於 Kamaraj hall、観客約1,600名(収容定員1,690名)

総観客数: いずれの会場もほぼ満席(約2,600名)

※「公演を成功させる為」に2012年6月、9月の2回、訪印し、2都市で関係部署との詳細打合せを行いました。ニューデリーはAOTS-Alumni Delhi、国際交流基金の2部署を窓口、チェンナイはABK-AOTS-DOSOKAI、総領事館の2部署を窓口を御願いたしました。

演目: 塵輪(じんりん)、恵比寿(えびす)、大蛇(おろち)の3演目(石見神楽の代表的な演目です。)

浜田市観光協会のHPを参照して下さい。浜田市観光情報案内 <http://www.kankou-hamada.org/index.php>

観客の反応: いずれの会場も大盛況で、公演途中で退席した観客はゼロでした。豪華絢爛な衣装、ハイテンポなお囃子、インド起源の物語等でインド人の感性と合致していました。特に72歳の団員が舞う大蛇の動きには感心していました。お囃子も大好評でした。公演終了後、アンコール、再度の公演依頼等がありました。また舞台・楽屋へ押しかけて衣装・道具を直接触っていました。特にチェンナイは2008年に続いて2回目の公演なので、リピーターが大勢おられました。その中には芸術家のDr. Padma Subrahmanyam, Dr. Devikaもおられ、今後文化交流をしたいとの申入れがあり、協力を約束致しました。



マスコミによる報道: 公演前後の報道を両都市で新聞は15紙、TVは7社でした。特筆すべきはNHKが12月4日、総合TVで日本全国に報道したことです。(写真2、3)



全体計画: 神楽団の選定、資金計画(助成団体の調査等)、受入団体、公演都市、公演日程、全体日程等を対象として2011年2月より計画を開始し、その結果5月末までに、神楽団は浜田石見神楽社中連絡協議会(総勢15名、内女性2名)、主な助成団体は国際交流基金、インド文化関係評議会、インド商工会議所連合会、ABK-AOTS-DOSOKAI Tamilnadu Centre、島根県、浜田市、浜田商工会議所等となりました。

工場見学: ABAD OVERSEAS PVT. LTD チェンナイ冷凍加工工場、工場を見学しました。浜田市の主な地場産業である水産業関係の工場、また浜田市出身の坂根正弘様(日印協会副会長)が会長をされているコマツチェンナイ工場を訪問し(写真4)、公演も行いました。見学結果を浜田市の関係部署に報告しました。



御礼: 石見神楽インド公演には大勢の皆様の御協力のお蔭で成功裏に終了致しました。大変ありがとうございました。

今後文化交流が更に盛んになり草の根の如く広がることを祈念いたします。2017年が日印文化協定締結60周年です。今回の公演で再度の公演依頼、団員から再度公演をしたいとの要望がありましたので、実現したいと考えています。その節は皆様のご協力を御願いたします。

※写真提供1,4; 勝田友治理事、2; 在インド日本国大使館、3; 原佑二常務理事

6. 大阪大学における平林博理事長講演会と日印国交樹立60周年記念写真展 A Lecture by President Hirabayashi and a Photo Exhibition

平林理事長講演会・日印写真展実行委員
大阪大学法学部国際公共政策学科3年
川田 眞子

■はじめに

11月末、平林博理事長講演会と日印国交樹立60周年記念写真展が大阪大学にて開催され、私は両行事に実行委員として参加した。光栄にも月刊インドへの寄稿の機会を頂いたため、各行事についての報告と、それを受けての考察を述べたいと思う。

■過去3回の中で最大の規模となった「体験的外交論」

今年も平林博日印協会理事長の講演会が大阪大学にて開催された(写真1)。3年目の今年は「体験的外交論2012—国際政治の変貌と日本外交論—」というタイトルで、今までで一番大きく格式高い会場で行われた。また悪天候の中、昨年を上回る300名もの学生・社会人が足を運んで下さった(写真2)。外交と言うテーマであっただけに、文系学生、とりわけ外国語学部の学生が目立ったが、理系学生の姿も見えた。

外務省の高官、橋本龍太郎首相(当時)の側近として活躍された経験を踏まえて、過去数十年の日本の首脳外交の歩みや最近の領土問題をめぐる日中韓の関係についての言及もあった。講演内容と、それに対する考察はまた後述する。

今回は講演会の後に大阪大学大学院国際公共政策研究科(以下OSIPP)の星野俊也研究科長を交えてのトークセッションの時間が設けられた(写真3)。大阪大学の学生からの単刀直入な質問と、「直言する外交官」と評される平林理事長らしい回答は実に見応えがあった。アンケート結果にも「これからは積極的に自分の意見が持てそうだ」とあったが、多くの学生が刺激を持って帰ったことであろう。

〈左: 星野研究科長 右: 平林理事長〉



写真1



写真2



写真3

■平林理事長の指摘から考える「国家戦略」

今回の講演会であった中国の世界戦略や、理事長の著書『フランスの国家ブランド』を読んで考えるのは、日本の戦略は何か、日本の方針の軸は何かということである。ある特定の課題が“単品で”話題にはなるものの、それ以上の話にはならないことが多い。

私としては、各主体においては各々の信念を持って取り組んでいるが、日本国全体を貫く軸がどこにもないような印象を受ける。まず、日本はどのような国であるべきか、国家として大事にする価値、国際社会で果たすべき役割を明確に示してから、各方面の戦略に落とし込んでいく必要があるのではないだろうか。かつて発展途上にあった頃は、「先進国に追いつけ追い越せ」でひたすら発展すればよかった。しかし、今の日本はそうではない。自らビジョンを打ち出し、ブランドを確立させ、周りを巻き込んで行かねばならない。

今までの日本人の歩みをしっかりと継承して、次に進むべきところを見定める。この数年にわたる平林理事長の大阪大学での講演は、この「日本の歩み」のバトンタッチの一助となることと確信している。

■外交におけるインドの重要性

平林理事長の駐インド大使の経験に裏付けされた見解から強く感じたのは、インドと言う国が経済的、

政治的だけでなく、地政学的にも重要であるということである。「日本外交は日米同盟が基軸」という言葉がよく使われるが、これは「日米同盟が“すべて”」というわけではない。

地図を広げて見ると、インドが重要なのは一目瞭然である。日米関係や日中関係などよく話題になるが、その関係を二国間だけで考えるのはナンセンスである。これからも友好関係を継続・発展させていくことは各方面で求められていくであろう。

■関西初開催の日印公式写真展



また、同時に日印国交樹立 60 周年を記念した写真展も大阪大学会館にて開催された。この公式写真展は関西では初めての取り組みで、日印協会や在日インド大使館のご厚意があって、開催することができた。会場の様子としては、中央で大きく交差した日印両国の国旗を囲むように写真が並んでおり、一歩足を踏み入れただけで日印友好の歴史の重みを感じるものになっていた。

学生はもちろんのこと、日印関係に関心のある社会人やインド人留学生まで、実に多くの方々で賑わった。私も 3 回ほど足を運んだが、行くたびに「ちょっと行ってみようか!」と声を掛け合って来場する学生の姿を見かけ、写真展に携わった者として嬉しく思った。

期間中に 300 名ほどの来場者があり、うち 30 名ほどから祝福のメッセージを頂いた。この大阪の地でも多くの方が日印国交 60 周年を祝福しているという実感が沸いた。

■大阪大学と日印関係について

大阪大学には関西で唯一、ヒンディー語専攻およびウルドゥー語専攻があり、日本の中でも有数の「親印」の土壤のある大学である。また、私も含め日印協会の学生会員になっている阪大生も少なくない。

加えて、来場者の様子を見るに、今回の写真展は、もともとインドに興味があった学生だけでなく、そうではない学生にも広く日印関係について知っていただく機会になった。大阪も日印関係の西の拠点として今後も発展することを願ってやまない。

■結びにかえて

今回、実行委員として二つの行事に携わってみて、日ごろ学部で学んでいることを深めることができただけでなく、多くの人との関わりの中でこそ得られたものがたくさんあった。大阪まで来て下さったプロジェクト・プランナー岩田様をはじめとする日印協会の皆様、インド大使館の皆様、OSIPP や外国語学部をはじめとする大阪大学関係者、そして何より平林理事長に心から御礼申し上げたい。

※写真提供 1,2,3; 大阪大学 SWADOM(大阪大学で国際関係や外交、外国語を学ぶ学生団体)

7. インドニュース (2012 年 12 月) News From India

I. 内政

12月5日

- 5日付ヒンドゥー紙等は、インド人民党が下院に提出した小売分野における FDI 規制緩和への反対の動議が否決されたことを報じている。反対票は 253 票、賛成票は 218 票。

メモ:

動議の可決には、出席議員の過半数の賛成が必要。社会主義党(SP)及び大衆社会党(BSP)は、小売分野での FDI 規制緩和に反対する立場を取っているも、同党所属議員は投票開始前に議場を後にすることで、事実上与党側を支持した。併せて、インド中央銀行から提出されていたマルチ小売分野での FDI 投資を促すための外国為替法(FEMA)改正案についての反対の動議も否決された。

12月6日

- 7日付のヒンドゥー紙は、6日、インド原子力エネルギー規制委員会が、タミル・ナードゥ州にあるクダムクラム原子力発電所の第2段階の加熱を許可したことを発表。同発電所は、プーチン露大統領がインドを訪問する12月24日頃に臨界温度に達すると見られているが、同委員会はこのことを単なる偶然であると否定しているとのことである。
- 7日付のヒンドゥー紙によれば、BSPのマヤワティ党首は、上院(ラージャ・サバー)における FDI 規制緩和反対の動議が提出されれば、与党統一進歩連合(UPA)を支持する姿勢を明らかにした。SPも9名の議員が投票時に議場を後にすることを明確にしており、また、元クリケット選手のサッチン・テンドゥルカール議員が当日不在であることが明らかとなっていることから、出席議員数は234名、UPAはBSPの支持を含めれば100票を有することとなり、9名の大統領任命議員9名を併せて、反対票は119票となり、動議を否決することができることと報じている(注:後日報道によれば、7日に行われた上院の審議において、SP所属議員も反対票を投じ、否決されたとのことである)。

12月11日

- 13日付のヒンドゥー紙は、シタール奏者のラビ・シャンカール氏が、アメリカのサンディエゴにおいて、妻と娘のアヌーシュカ・シャンカール・ライトとノラ・ジョーンズに見守られ息を引き取ったことを伝えている。

メモ:

ラビ・シャンカール氏は1920年生まれのインドのシタール奏者・作曲家。ビートルズのジョージ・ハリスン等の音楽家とジャンルを超えて共演し、インドの古典音楽を世界に紹介するとともに、インド音楽の可能性を広げた。

12月16日

- 18日付ヒンドゥー紙他は、16日夜、南デリーにおいて、市内を走行中バスの車中で23歳の女性に対する集団暴行事件及び同行していた男性の友人に対する暴力事件が発生したことを報じている。同紙によれば、警察は、バスの運転手含む2名を逮捕、残り2名の容疑者を追跡しているとのことである。

メモ:

- 本件に関するその後のインド報道概要は以下のとおり。
- *同女学生と男性の友人は、南デリーのサケート地区からの帰宅の途中、ムニルカ地区からバスに乗車。同バスは、市内を走る通常のバスではなく、運賃が割高のパールム行きの私バスであり、窓ガラスは曇りガラスで、被害にあった2人の他に4名の乗客が乗車していた。この乗客が女学生をからかったことから、乗客と男性の友人との間で口論となり、男性への暴力、女学生への集団暴行に至ったと見られている。
 - *事件を受けて、デリー市内では、大学生、市民団体、女性団体による抗議活動が行われた。また、性犯罪対策を求める抗議デモがインド全土に拡大。
 - *シン首相は、女性国会議員との面会の後に、本件は非常に憎むべき犯罪である旨発表。
 - *女学生は、26日、治療のため臓器移植で著名なシンガポールの病院に移送されるも、29日に死亡。30日には、デリー市内で追悼のための行進がおこなわれた。
 - *女学生の遺体は、シンガポールから移送され、31日の日の出前に厳重な警戒の下で火葬が行われた。シン首相、ソニア・ガンディー・ कांग्रेस党総裁は、空港から家族に付き添った。
 - *1月2日には、サケート地区の裁判所において、迅速な手続きによる裁判が開始。同時に5つの裁判が行われる予定。

12月17日

- 18日付のヒンドゥー紙他は、インド政府の職員の昇進に関する留保枠を設定するための憲法第117条修正案が、上院において可決されたことを報じている。

メモ:

イスラム教徒やその他後進階級(OBC)を支持層に持つSPIは、本修正案に反対、19日には下院に提出されるも、SP所属議員の強い反対のために審議とならず、投票に付されないままに国会が閉会した。

12月20日

- インド政府発表によれば、11月22日に開幕したインド冬期国会が閉幕。今国会では、6法案(銀行法改正案、マネーロンダリング防止法改正案、非合法活動防止法改正法案等)が可決、懸案となっているオンブズマン制度導入法案(ロークパル法)、食糧安全保障法案、保険法改正法案や年金基金改正法案については、進展がなかった。
- インド選挙管理委員会は、グジャラート州及びヒマーチャル・プラデーシュ州の州議会選挙の結果を発表した。

メモ:同委員会による選挙結果は以下のとおり。

(1)グジャラート州

*全182議席のうち、インド人民党(BJP)が115議席を獲得(前回選挙から2議席減)、 कांग्रेस党は61議席(2議席増)、民族主義会議派(NCP)2議席、ジャナタ・ダル統一(JDU)1議席、その他3議席。

*モディ同州首相にとっては、3期連続の勝利となるが、27日に州首相の就任式が行われ、ジャヤラリター・タミル・ナードゥ州首相、シン・パンジャブ州首相等も参加した。

*2014年の BJP の首相候補とも噂されるモディ首相に対し、支持者から「首相に！」との声があがると、モディ首相は、あと5年は州首相としての職務を全うする旨答えたとのことである。

(2)ヒマーチャル・プラデーシュ州

*全68議席のうち、 कांग्रेस党が36議席(前回選挙から13議席増)、 BJP が26議席(15議席減)、その他6議席。

*26日には、ヴィルバドラ・シン州首相の就任式が行われた。

II. 経済

12月4日

- 5日付のヒンドゥー紙等は、国際オリンピック委員会(IOC)が、同委員会の警告にも関わらず、インドオリンピック協会(IOA)が選挙を実施したことを理由として、資格停止を命じたことを報じている。

12月7日

- 7日付のヒンドゥー紙は、モルジブのイブラヒム・ナシール国際空港から、インドの多国籍企業であるGMRが7日付で撤退、モルジブ空港会社(MACL)に経営権が引き渡されることが決まった旨報じている。これはシンガポールの控訴院が、モルジブ政府がGMRとの契約を破棄する権利を有しているとの判断を下したことに基づくものであるが、GMRの撤退は、モルジブへのインドの戦略的な関与と同地域におけるインドのイメージにとって深刻な後退となると報じている。ナシード・モルジブ前大統領は、「モ」政府に対して、GMRの撤退を見直すよう求めている。

メモ:

その後の報道として、8日付のヒンドゥー紙は、7日、モルジブ政府がGMRからの経営権を引き受け、MACLIに引き渡されたことを報じている。これに対して、GMRの報道担当は、引き渡しではなく、モルジブ政府が経営権を奪ったものと主張しており、またシンガポール控訴院での決定についても、補償の可能性について法的に検討しているとのことである。GMRは、2010年にモルジブ政府との間で25年の契約を締結するも、本年11月27日にモルジブ政府が一方的に同契約の破棄を通告し、12月1日、GMRに対して7日間で空港を受け渡すように通告したとされている。

17日付のインド報道によれば、GMRは、モルジブ政府に対し8億ドルの保証を求め、同政府は補償額はGMRの主張する額の半分である4億ドル程度と主張しているとのこと。

12月8日

- 9日付のヒンドゥー紙は、8日、カマル・ナート都市開発大臣が、年末年始を目処に、デリーメトロ空港線

が開通予定であると述べたことを報じている。同路線は、建築中に発見された工事不備のため、閉鎖されていた。

12月11日

- 12日付ヒンドゥー紙は、インド政府は、補助金付きのLPG家庭用ガスシリンダーの年間割当て数を6本から9本に引き上げることを検討していることを報じている。これは、10日のモイリー石油・天然ガス大臣が、報道関係者との会談において明らかにしたものの。

12月12日

- 11日、インド統計局は、本年10月の鉱工業生産指数(IIP)の速報値を前年同月比8.2%増と発表。

メモ:

13日付のビジネスライン紙等によれば、この数値は16ヶ月振りの回復。これは資本財と消費財の回復と昨年同月の数値が低かったことが主な要因にあるとのこと。チダンバラン財務大臣は市場予測をはるかに超えた数値に満足の意を示しているも、産業界や経済学者は、今回の数値は前年数値のベース効果によるものであり、一時的な現象と見ている。11月の小売インフレ率が9.9%となっていることから、産業界は引き続いての利下げを期待しているとのこと。

12月18日

- 19日付タイムス・オブ・インディア紙等は、12月28日付でサイラス・ミストリー・タタ・サンズ副会長が会長に就任し、ラタン・タタ会長が会長を辞任し、名誉会長に就任することを報じている。

メモ:

同報道によれば、75歳の誕生日となる12月28日に会長職を辞任するラタン・タタ会長は、タタ・サンズの名誉会長に加えて、タタ・モーターズの名誉会長を兼任する。

- 19日付のビジネス・スタンダード紙他によれば、インド準備銀行(RBI)は、政策決定会合において、政策金利であるレポレートと預金準備率を、それぞれ現行の8.0%と4.25%のまま据え置くことを決定。

メモ:

同発表において、インフレについて、野菜、鉱物、燃料価格が落ち着いた結果、11月は卸売物価指数が7.2%まで下落。消費者物価は食料品の値上がりを受けて上昇しているとしているが、いくつかの分野で供給力が需要を超過していることから、コア・インフレ率については、顕著に軟化しているとの見方を示している。

12月20日

- 21日付ビジネス・スタンダード紙他は、インド・ASEAN間のサービス貿易・投資に関するFTA交渉が完了し、2013年8月に署名されることを報じている。

メモ:

インド・ASEAN間では、2011年に物品貿易に関するFTAが先行して署名・発効。サービス貿易及び投資分野については継続交渉となっていた。報道によれば、サービス貿易分野として、インドが強みを有している医療、医薬品、バイオテクノロジー、観光、運輸、情報通信、建設などが含まれ、また、自然人の移動については、医者、建築家、技術者等の専門家の自由な移動を通じ、インドからASEAN地域へ自由な移動を通じた市場開拓が期待されるとのことである。

Ⅲ. 外交

12月2日

- 3日付のヒンドゥー紙は、メノン国家安全保障補佐官が、中国との間で、国境問題を含む戦略的な問題に関する両国の共通関心事項について協議するため、北京に到着したことを報じている。メノン補佐官の北京訪問は2日間であり、3日に予定される協議はあくまでも非公式なものであるとのこと。なお、インド外務省の発表によれば、両国は、11月30日、デリーにおいて第2回の作業メカニズム会合を開催している。

12月4日

- 5日付のヒンドゥー紙は、中国との協議を終えたメノン国家安全保障補佐官が、国境問題について、「相当な進展があった」旨述べたことを伝えている。

メモ:

同報道によれば、両国は、両国間の国境問題解決のための枠組みに関するこれまでの交渉についての「共通の認識」に関する報告書の準備をおこなったとのことであり、同報告書は、両国首脳に提出される予定。インドと中国は、これまで特別代表による15回にわたる協議を行っており、問題解決のための枠組みの合意含む第2段階にあるが、専門家によれば、2005年以降ほとんど進展が見られていないとのこと。報告書の作成にあたり、2005年の合意の解釈を巡っても両国の見解に違いがあることを報じた報道について、メノン補佐官は、全くの推測であるとして報道を否定し、両国間協議に進展があったと述べた。

12月10日

- 11日付のヒンドゥー紙は、インドを訪問中のヤヌコーヴィチ・ウクライナ大統領とシン首相の会談において、インドとウクライナが両国間の広範な防衛協力について合意する内容の5つの文書に署名したことを伝えている。同紙によれば、インドは、これまでの軍備の売り買いという関係から、新型の共同開発の関係の構築を考えているとのこと。

メモ:

同紙によれば、ウクライナはインドの100機の輸送飛行艇の近代化や、軍艦のエンジン供給を積極的に行っているとのこと。ウクライナは、原子力安全に関するウクライナの知見の共有にも合意した。

12月20日

- 21日付のヒンドゥー紙は、ケララ州高等裁判所が、拘留中のイタリア海兵隊員2名について、6千万ルピーの保釈金の支払い及びインドに帰国することを条件とし、2週間の帰国を許可したことを報じている(注: イタリアの民間船舶であるエンリカ・クレシー号に乗船していた2名のイタリア海兵隊員が、インドの漁民2名を殺害したとして、ケララ州警察に逮捕され、裁判が行われている)。

12月20～21日

- インド外務省発表によれば、デリーにおいて、インド・ASEAN 記念サミットが開催された。

メモ:

本件サミットは、インドがASEANの対話パートナーとなってから20年、及びインド・ASEANサミット設立から10周年を記念して開催され、カンボジア、ラオス、マレーシア、シンガポール、タイ、インドネシア、ミャンマー、ブルネイ及びフィリピンからそれぞれ首脳が出席した(ブルネイは国王、フィリピンは副大統領)。参加した首脳は、「ビジョン声明」を採択し、ASEANとインドのパートナーシップを戦略的パートナーシップへの格上げ、政治・安全保障、経済、開発や連結性において協力することで一致した。

12月24日

- インド外務省発表によれば、24日、インドを訪問中のプーチン露大統領とシン首相との間で第13回年次首脳会談が行われ、両首脳は共同声明を発表。

メモ:

共同声明においては、民生用原子力協力、安保理改革、軍縮・不拡散、アジア及びインド洋・太平洋地域における安全保障協力の強化等について協力することで一致。

IV. 日印関係

12月28日

- 日インド外相間電話会談及び首脳間の電話会談を実施(概要は、外務省HPにておいてご確認いただけます)。
日インド首相電話会談 URL http://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/s_abe2/121228_02.html
日インド外相電話会談 URL http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/24/12/1228_06.html

今月の注目点 : インドの留保制度

冬期国会において、小売分野のFDIとともに争点となったのは、公務員の昇進に関する留保制度を可能とするための憲法修正案であった。留保制度とは、全ての国民に対して等しい権利を認めつつ、歴史的な差別や特定のカテゴリーの人々の利益を促進するため、特定のカテゴリーの人々を対象として高等教育機関への入学や公的雇用を優先する制度であり、アメリカのアファーマティブ・アクション(差別是正措置)と趣旨を同じくする。現在、インド連邦政府の高等教育機関や公的雇用においては、指定カースト(SC: 15%), 指定部族(ST: 7.5%), その他後進諸階級(Other Backward Classes(OBC: 27%)について一定の留保枠が設けられている。

今回論点となったのは、SC及びSTカテゴリーに属する公務員の昇進について、一定の留保枠を設けることで、政府要職における同カテゴリーのプレゼンスを確保することを可能とする憲法改正。同修正に反対したSP党は、その支持母体が、その他の後進諸階級(OBC)であるため、OBCやイスラム教徒についても同様の留保枠を設けるよう求めている。

OBCの留保枠を巡っては、1991年にマンダル委員会の報告書の実施にあたり、北部インドを中心に激しい反留保運動が展開されたことが思い起こされる。留保制度をめぐっては、インド国内において、不平等を是正する措置として積極的に評価する声、留保枠の設置は逆差別措置となることや、カースト意識の存続につながるとする懐疑的な意見、今回の昇進についての留保枠設置のような結果の平等を巡る是非、また、留保枠を設けても各カテゴリーの中において優位な立場にある人々のみを優遇し、カテゴリー内の全ての人々に恩恵が行き渡っていないのではないかというクリーミー・レイヤー論、それと関連して、OBCの中でも、最も後進諸階級(Most Backward Classes: MBC)というカテゴリーを設けるべきであるという意見など、国内においても様々な議論がなされているようである。また、女性に関する留保制度については、パンチャーヤット制度など、地方自治においては既に女性議員への留保制度が導入されており、連邦下院においても女性議員の留保枠の設置が議論されている(本件は、ソニア・ガンディー総裁肝入りの改正案となっている)。留保制度は、インドのような多様性を抱える国における民主主義の実践における取り組みの一つと言えるだろう。

8. イベント紹介 Japan-India Events

—◇ 最近のイベント ◇—

◆東京国立博物館東洋館リニューアルオープン

耐震改修工事を終えた東洋館は、1月2日(水)にリニューアルオープンしました。耐震強度が上がり、これまで以上に展示に工夫をこらしています。

“東洋館リニューアルオープン”のコンセプトは「東洋美術をめぐる旅」です。インド関連では、ガンダーラの彫刻、染色、細密画の展示があります。

オープニングイベントは1月2日に行われましたが、リニューアルオープン展示は3月31日まで行われています。当協会のヴァイラーバ像も、大倉集古館での展示を終え、新装なった東洋館に戻ってきました。

日本に居ながら東洋美術をめぐる旅ができる、そしてインドの美術に触れられる東洋館、お時間のある時に立ち寄っては如何でしょうか。

東京国立博物館 東京都台東区上野公園13-9 ☎ 03-3822-1111 JR上野駅公園口下車 徒歩10分
料金: 一般600円 / 大学生400円 / 高校生以下、満18歳未満、満70歳以上の方 無料
開館: 9:30~17:00(入館は16:30まで)(原則月曜日は休館日、振替開館あり)



＝◇ 今後のイベント ◇＝

◆恋する輪廻 オーム・シャンティ・オーム

ハリウッド映画最高峰が、ついに日本で劇場公開されます。主演は、シャー・ルク・カーン、ヒロインはデイーピカー・パードゥコーン、ハリウッド映画お約束の歌と踊りも満載の大作です。



2013年3月公開予定

※東京・渋谷 シネマライズ

渋谷区宇田川町13-17 ライズビル

☎ 03-3464-0051

<http://www.cinemarise.com/theater/>

※大阪・梅田 シネ・リーブル梅田

大阪府大阪市北区大淀中1-1-88

梅田スカイビルタワーイースト3F

☎ 06-6440-5930

http://www.ttcg.jp/cinelibre_umeda/

※大阪・心斎橋 シネマート心斎橋

大阪市中央区西心斎橋1-6-14

ビッグステップビル4階

☎ 06-6282-0815

<http://www.cinemart.co.jp/theater/shinsaibashi/>

※兵庫・神戸 元町映画館

神戸市中央区元町通り4-1-12

☎ 078-366-2636

<http://www.motoei.com/>



上映時間・料金等、詳細は各映画館にお問い合わせ下さい。

◆交流会のお誘い Members Gathering

今年も、恒例の交流会を下記の通り開催致します。

協会会員の皆様のみならず、インドに仕事の面で関わりのある方、インドに興味のある方、とにかくインド好きな方、自国を離れ、遠い日本で頑張っている外国の方々、日印交流の輪を広げるため、どうぞお誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。

参加は会員・非会員を問いません。Non Members are welcome!

♥日 時: 2013年2月22日(金) 18:00~20:00 Friday Feb. 22nd, 2013

♥会 場: インド料理レストラン“ボンベイ クラブ 汐留店” Indian Restaurant “Bombay Club, Shiodome”
東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター2F ☎ 03-5537-2215

♥参加費(飲物代込み): 一般 4,000円 / 学生 2,000円

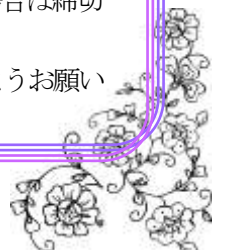
♥定 員: 60名(先着順)

♥締切り: 2月15日(金)必着 (お申込・お振込み共に)

Please send application form and remit fee by Fri. Feb 15th, 2013

参加ご希望のかたは、2月15日(金)までに、同封の申込用紙に必要事項をご記入の上、ファクスをお送り頂くか、事務局宛にメールでお申込下さい。参加費は事前振込とさせていただきます。定員に達した場合は締切り日前でもお断りする場合がございます。お断りする場合のみご連絡致します。

なお、2月19日以降のキャンセルの場合は返金致しかねます。何卒、ご理解ご了承下さいますようお願い申し上げます。



9. 新刊書紹介 Book Review

§ 『インドのひみつ』 学研まんがでよくわかるシリーズ 78



著者：大石 容子(マンガ) / 大石 宣幸(構成)

発行：学研パブリッシングコミュニケーションビジネス事業室

定価：非売品

日印国交樹立 60 周年記念の記念行事の一環として、日本の子供たちにインドのことを知ってもらおうと企画され、サティヤサイ教育協会と公益社団法人横浜印度商協会の協力により、出版されました。

昨年の 12 月 14 日(金)に、在京インド大使館で出版記念式典が行われ、本書は全国の小学校や公立図書館に寄贈されました。

インドからの転校生を迎え入れたことをきっかけに、クラスメイト達がインドの事や、日本との関わりを学んでいくストーリーです。カレーやターバンなど、ありがちなインドのイメージを入りに、これからの日印の友好関係までが盛り込まれています。協会にも寄贈頂いており、会員の方には貸出をしておりますので、是非ご活用下さい。

§ 『週刊 マンガ世界の偉人』



2 号『マザー・テレサ』

著者：風屋カズヤ

監修：山口 正

沖 守弘

価格：490 円(税込)



47 号『ガンディー』

著者：馬場 民雄

監修：山口 正

林 明

価格：490 円(税込)

2012 年 1 月から、朝日新聞出版がシリーズで発刊している『週刊 マンガ世界の偉人』シリーズです。2 号と、47 号に、インドの偉人が取り上げられています。

子供が読み易いようにマンガで描かれていますが、それぞれに精通した識者が監修をしています。『マザー・テレサ』には、監修者の写真家・沖正弘さんによる写真も掲載され、『ガンディー』では、弘前大学・林明准教授も加わり服装の時代考証にも正確を期しています。子供だけでなく、家族で読んでも楽しめる偉人伝です。

§ 『ムスリムの女たちのインド 増補新刊』



著者：柴原 三貴子(文・写真)

発行：木犀者

価格：2,500 円+税 ISBN 978-4-49618-061-9 C0095

1989 年のインド 1 人旅の後に、インド料理レストランでアルバイトをし、そこで知り合ったイスラーム教徒のシェフの故郷の結婚式に誘われたことから、“ムスリムの女たち”と深く関わっていく様子が、丁寧な文章と情愛の籠った写真で丹念に綴られています。

ウッタルプラデーシュ州の小さな村で 1 年を過ごし、数年後に結ばれる伴侶との縁の不思議さも、イスラーム教を受け入れていた筆者にとっては、自然なことだったようです。初めて村の礼拝に加わったとき、「私以外の女性たちが向かう先にはひれ伏すべき神がいて、私の前には誰もいない」と感じた筆者が、今ひれ伏す先に何を見ているのでしょうか。

§ 『現代インド・フォーラム』 2013年 冬季号 No.16

1月7日に、協会HPにアップ致しました。今号では、下記三氏による論文を掲載しております。



*南アジアにおける冷戦構造の崩壊とパラダイムの激変

Collapse of the Cold War Structure and Violent Shift of Paradigm in South Asia

小林 俊二 (元駐インド大使)

*経済改革をめぐるインドの政党政治

— 総合小売業への海外直接投資に見る政治の現況

Party Politics in the Introduction of FDI in Multi-brand Retail Sector in India

近藤 則夫 (日本貿易振興機構 アジア経済研究所)

*インドの環境運動 — チプコー運動再考

Environmental Movement in India

石坂 晋哉 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員研究員)

こちら(URL <http://www.japan-india.com/pdf/forum/52-1.pdf>)からご覧頂けます。是非お読み下さい。

§ 『大倉集古館の名品』



編集：山梨県立美術館 大倉集古館

発行：大倉集古館

昨年創立95周年を迎えた大倉集古館が、約2,500点を超える所蔵品の中から選び抜いた作品を名品図録としてまとめたものです。

掲載作品は、第一章 信仰の美、第二章 繚乱の美、第三章 成功と幽玄、第四章 清新なる息吹、となっています。特に第一章には「中世の宗教絵画」と副題が付けられているだけあって、インドから伝わってきた仏教が、芸術として昇華された仏画となって、更に信仰を篤くした思いを感じます。

本誌は、大倉集古館の館内ミュージアムショップにて販売されています。購入方法、価格等は、大倉集古館へお問い合わせ下さい。☎ 03-3583-0781

※協会へご寄贈頂いた図書は、会員の方々へ貸出を行っております。一般の方は事務所内での閲覧のみ可能です。



『月刊インド』に、
インドに関わる事業や活動を、定期的に掲載したり、
案内チラシを入れることを検討されませんか？

会社の広報やイベントのご案内のご担当の方、
まずは当協会事務局までご相談下さい。

☎ 03-5640-7604 E-mail partner@japan-india.com

10. 日印貿易概況(2012年第3四半期-前年との比較) Trade statistics between Japan & India (July-September)

(単位：100万円)

輸 出 総 額 (日本 → インド)	2011年7~9月 第3・四半期	2012年7~9月 第3・四半期	輸 入 総 額 (インド → 日本)	2011年7~9月 第3・四半期	2012年7~9月 第3・四半期
	221,733	207,161		128,246	127,385
食 料 品	66	56	食 料 品	20,414	12,025
原 料 品	3,140	3,006	魚介類	10,689	7,658
鉱 物 性 燃 料	5,914	8,051	(えび)	9,393	5,757
化 学 製 品	17,796	18,649	肉類	0	-
有機化合物	6,105	5,712	穀物類	112	72
医薬品	393	508	野菜	58	55
プラスチック	5,466	6,382	果実	1,436	1,637
原 料 別 製 品	46,199	44,336	原 料 品	10,933	11,640
鉄鋼	28,743	26,465	木材	16	46
非鉄金属	2,214	2,778	非鉄金属鉱	1,528	3,613
金属製品	6,429	6,686	鉄鉱石	3,542	2,615
織物用糸・繊維製品	1,893	1,970	大豆	0	-
非金属鉱物製品	2,446	2,285	鉱 物 性 燃 料	50,212	47,251
ゴム製品	3,536	3,616	原油及び粗油	0	-
紙類・紙製品	931	529	石油製品	50,212	47,250
一 般 機 械	77,020	75,501	(ナフサ等)	50,201	47,234
原動機	21,385	15,631	石炭	0	-
電算機類(含周辺機器)	542	747	化 学 製 品	7,836	16,871
電算機類の部分品	438	941	有機化合物	8,309	10,100
金属加工機械	11,407	19,802	医薬品	3,855	2,595
ポンプ・遠心分離器	8,712	7,064	原 料 別 製 品	13,473	21,282
建設用・鉱山用機械	3,087	1,353	鉄鋼原料製品	4,974	6,327
荷役機械	5,135	3,849	非鉄金属	1,509	221
加熱用・冷却用機器	2,329	3,262	金属製品	422	521
繊維機械	5,766	4,362	織物用糸・繊維製品	4,132	3,746
ベアリング	1,861	1,889	ダイヤモンド加工品	8,740	9,195
電 気 機 器	37,159	30,711	貴石及び半貴石加工品	173	215
半導体等電子部品	7,716	2,795	その他非金属鉱物製品	317	9,807
(I C)	1,773	1,586	木製品等(除家具)	26	38
映像機器	1,871	1,358	一 般 機 械	2,352	3,543
(映像記録・再生機器)	1,792	1,315	原動機	474	899
(テレビ受像機)	76	44	電算機類(含周辺機器)	16	13
音響機器	38	24	電算機類の部分品	98	111
音響・映像機器の部分品	64	123	電 気 機 器	2,212	2,912
重電機器	4,024	5,079	半導体等電子部品	61	361
通信機	909	270	(I C)	37	44
電気計測機器	6,783	6,667	音響映像機器(含部品)	10	12
電気回路等の機器	8,348	7,124	(映像記録・再生機器)	0	1
電池	198	167	重電機器	292	246
輸 送 用 機 器	17,340	12,962	通信機	114	205
自動車	1,930	408	電気計測機器	213	381
(乗用車)	1,929	298	輸送用機器	1,170	2,143
(バス・トラック)	612	45	自動車	141	58
自動車の部分品	13,543	11,065	自動車の部分品	925	1,581
二輪自動車	77	38	航空機類	6	-
船舶	0	-	そ の 他	8,159	9,719
そ の 他	17,100	13,887	科学光学機器	218	201
科学光学機器	3,798	3,590	衣類・同付属品	4,672	5,061
写真用・映画用材料	1,511	1,598	家具	118	231
記録媒体(含記録済)	528	361	バッグ類	845	1,140

“0”は表示単位に満たないもの、“-”はデータの無いもの

資料：公益財団法人日本関税協会『外国貿易概況』『日本貿易月表』

11. 掲示板 Notice

＜次回の『月刊インド』の発送日＞

次回発送は2月15日(金)を予定しております。2-3月合併号ですので、催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

＜事務局からのお願い＞

『月刊インド』でのご案内が間に合わないイベント等のお知らせを、E-mailを利用して送りすることがございます。その際、必ず何名かの方が宛先不明で戻ってきてしまいます。メールアドレスを登録しているはずなのに案内が来ないという方、メールアドレスが未登録の方、事務局までご一報下さい。

＜編集後記＞

明けましておめでとうございます。

昨年は、日印国交樹立60周年にちなんで、イベントも多く開催され、日本ではインド紹介の番組も多かったように思います。そんな中、昨年末にインドで放送が始まった“Suraj-The Rising Star”は注目を集めているようですが、これが日本でも見られるとわかり、新年早々、早速見てみました。

しかし、当然全編ヒンディー語、聞き取れるのはナヒン、アッチャー、スーラジ、程度でした。何を言っているのか全く分かりませんが、モトは『巨人の星』ですから、「あれがクリケットの星だ」とか言っているのだろと、勝手に想像していると、何となく話も分かるような気がしてきます。

こちらのサイトで視聴できます。 URL <http://colors.in.com/mena/>

今年も、日印関連のホットな出来事をタイムリーに皆様にお届けできるよう、日印友好に役立てよう、事務局員一同頑張ります。本年も引き続き、ご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

会員の皆様方のご多幸をお祈り申し上げます。

(記 渡邊恭子)



入会随時受付中



1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された日印協会は、これまで日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。今年は、日印協会110周年という記念すべき年であり、昨年に引き続き両国の友好関係を更に深める為にも、協会会員の獲得は重要な課題であると考えています。

インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人 6,000円/口
学生 3,000円/口
一般法人会員 100,000円/口
特別法人会員 150,000円/口

☆入会金 個人 2,000円
学生 1,000円
法人 5,000円
(一般法人、特別法人会員共に)



本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.110 No.1 (2013年1月18日発行) 発行者 平林博 編集者 青山 鑛一
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

